

④リトヴィン最高会議議長との会談（10月7日（金））

○リトヴィン最高会議議長

ようこそいらっしゃいました。今回の皆様のご訪問が有益なものとなりますことを願っております。

私たちは日本のことを親しい友人であると思っております。皆様方も、私たちのことを近しい親類のような気持ちになっていることでしょう。

両国の心の痛みは、コントロールできない原子力発電所事故によってもたらされたものです。

日本で、何十万人にも及ぶ人々が一瞬で家を失ったことは、それは、自分の街を捨てるということ、故郷を捨てるということを意味しております。

私は、チェルノブイリ事故のために25年前に故郷を捨てた人たちに会うことがあります。もう年配の高齢の方々ですが、今でも魂はあそこにあると、私に話しかけてきます。

私たちの心が、皆さんと同様に、痛むのは、奇しくも、チェルノブイリ事故25周年の時に、日本で、あのようなことが起きてしまったからです。

解決の方向に両国が向かうことを願っております。私たちは、解決の方策のアドバイスができると思います。

今回の震災からの復興ということ以外にも、両国は更なる協力関係を結ぶことができると思います。

9月の初めには、日本の衆議院議長をお迎えしました。その際、両国の復興・発展を誓い合いましたが、その約束を皆様のご訪問によって、更に質の高いものに変えられると思います。

○小平団長

私は、日本国国会の衆議院から派遣されました、衆議院チェルノブイリ原子力発電所事故等調査議員団 団長の小平忠正です。

まず、初めに、貴国独立20周年という記念すべき年に、先月の横路衆議院議長に引き続き、貴国を訪問できましたことを嬉しく思います。

併せて、東日本大震災に際して、貴議長からお見舞いの言葉を頂くとともに、貴国から、3月に毛布、また、8月には、放射線サーベイメーター、防護マスク等の放射能対策物資のご提供を頂いたことに感謝申し上げます。

それでは、議員団のメンバーを紹介いたします。（メンバー紹介）

我が国の福島原発事故の現状等につきましては、既に、先月の横路議長との会談の際に話題になったと聞いておりますので、省略させていただきます。

その後の進展を申し上げますと、国会においても、事故原因の究明等のた

め、国会に事故調査委員会を設置する法案を9月30日に成立させました。これは、調査対象である政府が設けた事故調査委員会とは別に、国会による調査を意図したもので、まず、我々議院運営委員会の両院合同協議会が、国会議員以外の有識者から委員長・委員合計10名を事実上選任し、その事故調査委員会が、政治的に中立な立場で、徹底した事実の調査及び政策提言を行うこととしており、場合によっては、事故調査委員会からの要請を受けて、議運両院合同協議会が必要な国政調査権を発動する内容になっております。

事故調査委員会は、早ければ今月中にも召集される見込みの次期国会で正式に設置され、活動を開始し、半年を目途に報告書を提出し、その後は、国会議員が議論をし、国会の責任で、事故原因を究明し、原発事故防止等のため講ずるべき対策を樹立する運びとなっております。

我が国は、これまで世界唯一の被爆国として、平和目的に限定した原子力の利用に努めてきましたが、我が国の原子力発電の安全確保体制において、巨大津波への想定や対策を欠いていたことについては、議会としても率直に反省しなければならないと痛感しております。今回の事故を受けて、我が国ははじめ世界では、脱原発に向けた動きが広がっておりますが、まずは、事故原因の徹底した究明と、そこから得られる教訓や知見を全面的に世界各国と共有して、より安全な原子力エネルギー利用に貢献することが我が国としての責務であると考えております。

ウクライナ議会においては、チェルノブイリ原発事故に対して、どのように取り組んで来られたのか、お聞かせ頂くとともに、今後の我が国議会における事故原因の究明や対策樹立等のために、何か有益なアドバイスを頂ければ幸いです。

最後になりましたが、先日、横路議長が貴議長とお会いした際、公式な賓客として日本にお招きしたい旨のオファーをし、貴議長も前向きに返答されたと伺っております。両国議会間の交流は極めて重要であり、貴議長の訪日ができるだけ早く実現することを願っております。

どうぞ、よろしくお願い致します。

○リトヴィン最高会議議長

公式訪問の招待をありがとうございます。

日本へ訪問団を組織して訪れるときは、福島を訪問したいと考えております。我が国の議会では、チェルノブイリ問題に関する特別委員会が設けられました。原因を知らずして対策は立てられませんので、原因究明は重要です。

チェルノブイリ原発事故に関しましては、発電所と関係のない軍が関わったのですが、そこでの様々な事実認定が、国民の独立への機運を高めました。多

くの人が、初期の段階で被害を受け、健康を害しました。私自身、小さい子供を連れて、散歩をしたのですが、実際は、散歩をしてはいけなかったところでした。

先ほど、脱原発の話がありましたが、第一の問題は、脱原発に踏み切った場合、何でエネルギーの代替をするか、という点で、今、約50%の電力は原子力によるものです。第二の問題は、原発を閉鎖するための莫大な費用がかかる点です。我が国では、政治的判断で、チェルノブイリ原子力発電所を閉鎖することにしたのですが、莫大な資金が使われてきております。また、それ以外にも、優秀な技師がロシアその他の国に流出するという事態も生じました。専門家たちの育成は、5年、10年の時間が必要な事業であり、大いなる損失であります。

現在、チェルノブイリ自体は、国際的な研究施設となっており、色々なケースで起きる被害に対する対策を研究しております。

我が国の議会では、昨日、補正予算を可決しましたが、これには、発電所の安全性に関する予算が含まれており、近い将来、それに関する決定がなされる予定です。

また、喫緊の課題としては、省エネルギーの推進、それに関する新たな人材の確保の問題があります。今、我が国のエネルギーは、ロシアに依存しております。約750億立方メートルのガスを消費しております。うち、約220億立方メートルを国内で生産しております。しかし、他にも、違うエネルギー源を探さることが必要になります。我が国には石炭もあり、地下にガスもあり、太陽、水力エネルギーもあります。肥沃な大地に、バイオエネルギーの元となる植物を植えたりしております。新しいエネルギーの開発について、世界的な悲劇を経験した日本とウクライナ両国で技術面で協力関係を深めることができると思います。

また、我々は、日本との関係強化による経済的発展も望んでおり、そのためには、政治的条件を整備しなければならない、とも考えております。

もう一つ、両国の文化的基盤の相互理解について、一言申し上げたいのですが、両国は非常に遠い距離にありますが、文化的な共通点を持っております。両国民の勤勉さ、デリカシー、我慢強さといった点で、我慢強さは、時にマイナスに働くこともありますが、たたかれながらも、生きていかなければならないわけです。両国民の共通性には、きっと御賛同頂けると思います。

今回のご訪問を嬉しく思います。

○小平団長

貴重なご意見をありがとうございました。日本側から、何かあれば、どうぞ。

○遠藤議員

すばらしい話を聞かせて頂き、ありがとうございました。

議長のご発言を聞いて、つらい経験を分かち合った両国は、深い友好関係を築くことができると確信しました。

特に、今回、チェルノブイリを見て、時間はかかっても、乗り越えられない困難はない、ということ、ウクライナの方から学び、その意を強くしました。

また、議長が言われた省エネルギーの問題、再生可能エネルギーの問題は、我が国においても最大の関心事であり、これから、どう取り組んでいくかが重要であります。

改めて、貴議長の訪日を心から望んでおりますことを申し上げ、私の感謝の気持ちを伝えさせていただきます。

○リトヴィン最高会議議長

どうもありがとうございました。

今後も、話し合いを続けて行く用意はあります。

ここには、よく政治関係者が来るのですが、責任ある答弁を心がけております。両国の課題が解決を見出せることを願っております。

このウクライナは決してチェルノブイリだけではありません。自然も人材も非常に豊かであり、神様はすべてを賜りになりました。神様の世界の創造がウクライナに残ったのです。美しい森、平原、そのきれいな国土が我々には与えられました。ウクライナの歴史は、生き残りの歴史であり、文化的に生き残るために、我々は、常に努力をしてきました。

本日は、ありがとうございました。



【写真】リトヴィン議長（中央）との会談



(出典:外務省)

リトヴィン最高会議議長の略歴

1. 氏 名: リトヴィン、ボロディミル・ミハイロヴィチ
LYTVYN, Volodymyr Mykhailovych
最高会議議長
2. 生年月日: 1956年4月28日
出生地: ジトーミル州スロボダ・ロマニフスカ生
3. 学 歴: 1978年 シェフチェンコ名称国立キエフ大学卒
1995年 歴史学博士
1997年 ウクライナ科学アカデミー準会員
2003年 ウクライナ科学アカデミー正会員
4. 職 歴: 1978-86年 シェフチェンコ記念国立キエフ大学歴史学部講師、助教授
1986-89年 ウクライナ・ソビエト社会主義共和国高等・職業中等教育省局長
1989-91年 ウクライナ共産党中央委員会参与、補佐官
1991-94年 シェフチェンコ記念国立キエフ大学歴史学部助教授
1994-95年 大統領補佐官
1995-96年 大統領府副長官
1996-99年 大統領第一補佐官、大統領補佐官長
1999-02年 大統領府長官
2002-06年 最高会議議長
2006-07年 科学アカデミー副総裁
2007年11月- 最高会議議員(「ブロック・リトヴィン」比例区第1位)
2008年12月- 最高会議議長
5. 家 族: 既婚、1男、1女
6. 趣 味: 書籍収集、読書、サッカー
7. 訪日歴 : 2003年5月(倉田参議院議長招待)
9. その他 : 科学技術分野における国家褒賞(1999)



(了)

(出典:外務省)

リトヴィン最高会議議長との会談

先方出席者リスト

(10月7日9:00, 於:最高会議)

- 1 リトヴィン最高会議議長(国民党)
Mr. Volodymyr Mykhailovych LYTVYN
- 2 ジェヴァゴ最高会議議員(対日友好議連会長)(ユーリア・ティモシェンコ・ブロック)
Mr. Kostiantyn Valentynovych ZHEVAHO
- 3 チョルノヴィル最高会議議員(外務委員会第一副委員長)('未来のための改革'グループ)
Mr. Taras Viacheslavovych CHORNOVIL

(事務方同席者)

ザイチューク最高会議事務局長

マルコフ最高会議事務局次長

チョルナ最高会議議長報道官

トレチャーク最高会議事務局国際関係局長

(了)